



猪瀬直樹 著

『昭和16年夏の敗戦
——新版——』

「昭和100年」、戦後80年の節目だから、新刊でもない書物をあえて紹介したい。と言うのは表向きの理由にすぎない。実は、「NHKスペシャル「シミュレーション ～昭和16年夏の敗戦～」制作開始のお知らせ」から、総力戦研究所での「模擬内閣」における総理大臣役は産業組合中央金庫の調査部出身者が務めていたことを知ったからだ。

「総力戦研究所」といういかつい名前と、模擬内閣でのシミュレーションにて日本必敗の結果が出ていたにもかかわらず開戦に突き進むという、なんともやりきれない内容が世間の関心を引いていたので、本書のことは知っていたものの、知ったかぶりして読んではいなかった。だが、大先輩が関係しているとなれば、これはもう読むしかない。

来る戦争が、武力戦にとどまらず経済戦、思想戦となることを認め、それに備えようと人材を集めて研究させるところまでは、時局をわきまえたまっとうな判断であったろう（尤も、英国に先例はあったようなので先進的とまでは言えないかもだが）。ただ、自ら見込んだ研究生の模擬内閣の出した結論にもかかわらず、実際の政府部門は開戦の既定路線を覆すに至らなかったのは極めて残念だ。また、そうした行く末が見通せていたにもかかわらず戦争へ突入させた指導部は、つまりは確信犯で、その責任は倍加する。

対米開戦はできない、と模擬内閣は結論付ける（P145）。だが、研究所の教官は開戦した前提でさらに演習を続けさせる。その後、南方物資の不足（輸送船が撃沈されるから）による継戦能力低下、本土空襲の激化、ソ連参戦まで見通し、数日後に、「わが国力の許す所ならず、との見解有力にして、閣議の一致を見るに至らず」と宣言し模擬内閣は総辞職する（P158）。

本書を通じて、一番怖いと思った部分は、実は総力戦研究所そのものの話ではない。数字の怖さだ。総力戦研究所とは別のところ（陸軍省整備局資源課）で石油の需

給バランスが試算され、開戦しても3年後まで石油は足りるというこでの試算結果が、開戦の決定に有利に使われたのだが、この作り方がまず大問題。事実というよりも、これくらいは南方で採れるだろう、という願望を基にしていること自体どうかと思うが、最後は、足りるという結論になるように、数字を作っていくのである。表にしてみると整合性はあるので、納得してしまうということだ。「これなら何とか戦争がやれそうだ、と皆が納得しあうために数字を並べたようなものだった。赤字になって、これではとても無理という表を作る雰囲気ではなかった。そうするよ、と決めるためには、そうしかたがないな、というプロセスがあって、じゃこうこうなのだから納得しなくちゃな、という感じだった。」と、目の前で数字が固まるのを見ていた担当者が述懐している（P181）。

実際にはないデータであるにもかかわらず、ある程度の理屈を付けて判断材料に仕立て上げることができる人を、組織は「頭が良い人」として重用する。だが、これはとても不誠実なことだ。では、前述の担当官は職を賭して抗議すべきだったか？あの状況下では、更迭後に後任が同じ作業をしただろう。ただ、その後任も抵抗したら？そして、そのまた後も…また、意思決定者は、時には調和を乱すのを覚悟で、示された数字の根拠を問い質し、違う結論に持って行くこともできる。数字を作るのも、数字を使って意思決定するのも、誠実に行われなければならない、とデータを扱うことの多い身として思い知らされる。

この新版では、現代の状況も昭和16年夏の状況に通底しているよ、との示唆が強化されている。単行本化された1983年時点では含まれていなかった、コロナ初年度の一斉休校を巡る政府内の意思決定プロセスの問題に触れた「新版あとがき」（2020年）と、石破茂氏と筆者の対談（2010年「中央公論」）がついているからだ。

安全保障のもう一つの大きな側面である食料安全保障については、残念ながら本書での言及は限られています。2017年1月号のこの「本棚」で当社平澤明彦理事研究員（掲載当時主席研究員）が紹介した『食糧も大丈夫也—開戦・終戦の決断と食糧—』（海野洋 著）も併せてご参照されると、当時の状況をより多面的に追体験できるかもしれません。

——中央公論新社 2020年6月

定価720円（税別）289頁——

（常務取締役 小畑秀樹・おばた ひでき）